様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １０ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６４６１７６８

研究課題名（和文）家族への心理教育がうつ病の予後を改善させる効果の検討

研究課題名（英文）Examination of the effect of psychological education for the family to improve the prognosis of depression.

研究代表者
藤田　博一（FUJITA, HIROKAZU）

高知大学・教育研究部医療学系医学教育部門・准教授

研究者番号：７０３８０３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：うつ病における家族心理教育の効果は、家族の表出された感情(EE; Expressed Emotion)を低下させることが可能である。この効果によって、患者の精神症状評価（BDI2; Beckうつ病評価尺度Ver.2(Beck Depression Inventory)、HAMD; ハミルトンうつ病評価尺度(Hamilton psychiatric rating scale fo depression）を改善させる効果もあることが確かめられた。
また、FAS(Family Attitude Scale)はEEの評価として、カットオフ値が62点であることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
全国で利用可能なうつ病心理教育に有用な教材開発を行うことができた。これによって、各施設でのうつ病心理教育の実施が良いとなり、普及を促進させる事ができた。また、うつ病の心理教育の効果を確認できたことで、各施設が確信を持ってうつ病の心理･社会的治療法の1つとして実施することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：The effect of family psychoeducation in depression can reduce the expressed emotion (EE) of the family. It was confirmed that this effect also had the effect of improving the psychiatric symptoms evaluation (BDI2; Beck Depression Inventory Ver.2, HAMD; Hamilton psychiatric rating scale for depression) of the patient.
In addition, FAS (Family Attitude Scale) was found to have a cutoff value of 62 points as an EE evaluation.

研究分野：心理教育

キーワード：うつ病　心理教育　表出された感情　予後

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

様々な社会情勢の変化からうつ病患者は急増し、年間自殺者が 3 万人を超える事態が長期間続いた。2009 年度の警察庁の調べでは、自殺の原因の 43.8%がうつ病によるものとされている。さらに厚生労働省の発表では、うつ病や自殺による個人的な損失のみならず、社会全体では 2 兆 7 千億円もの経済的な損失があると言われている。

うつ病は慢性疾患であり、問題点として再発が多いことが挙げられる。このため再発予防が極めて重要であり、心理社会的な治療である心理教育が期待されている。統合失調症ではすでに再発に影響を及ぼす要素として、家族の EE がよく知られているが、うつ病の再発予後に関する EE 研究は少数である。さらに、うつ病の心理教育の効果を証明した研究は国際的に見ても申請者らが初めてと思われる。生涯有病率からみても統合失調症と比してうつ病は 10 倍以上多く、心理教育のもつ重要性は高い。

家族の EE を正確に評価するためには Camberwell Family Interview（CFI）という半構造化面接が必要である。うつ病研究において、CFI での EE 判定と Randomized Controlled Trial を用いた心理教育の判定に関する研究はない。しかし、CFI のように 1 時間以上かかる測定では実用的ではない。その簡便法の代表的な方法として Five-Minute Speech Sample(FMSS)が用いられ、日本での妥当性も確認されている。しかしながら FMSS の特性上、うつ病の心理教育においては微妙な批判的側面を判定できず有用性が十分ではなかった。唯一、資格やトレーニングが必要ではない EE の質問紙で批判的な側面のみを測定する Family Attitude Scale(FAS)が開発され、統合失調症においては FAS の日本での妥当性について検討されてきた。うつ病における FAS の有用性が確認できれば、さらなる発展が期待できる状況である。

2. 研究の目的

うつ病において、以下の事を目的として計画を行った。

1. 心理教育は家族の EE を下げる効果があるのか？
2. 家族の EE とうつ病の予後や経過と相関があるのか？
3. うつ病において FAS が EE の測定に臨床的に使用が可能であるのか？

3. 研究の方法

うつ病の患者と同居している家族に対し、FMSS を試行し EE を判定する。高 EE と低 EE の群に分け、それぞれの群で、無作為に心理教育群と対照群にわける。心理教育群には家族への心理教育を実施する。9 ヶ月間、患者の症状経過について追跡調査を行い、経過後、再度 FMSS を試行する。対照群には 9 ヶ月経過した時点で、家族が希望すれば心理教育を実施する。

心理教育によって EE がどのように変化したか、患者の精神症状の変化に関して統計学的な検討を行う。FAS は、FMSS と同時に行う。相関に関しては ROC 曲線を作成し、うつ病でのカットオフ点を求める。

対象

研究参加へ同意の得られた大うつ病エピソードを満たす患者とその同居家族。

倫理的配慮

得られたデータは紙媒体によって連結可能な匿名化を行い、データの機密性、守秘性に配慮する。また、参加には説明と同意を、自由意志の尊重に配慮する。研究期間中、心理教育を行わなかった対照群には、終了後希望する家族へ心理教育を実施するよう配慮を行う。また、エントリーや面談に協力いただくごとに、QUO カードにて謝礼をお渡しした。

具体的な手順

1. 図 1（A）
   - (a) 患者本人には、うつ病の重症度として、国際的に汎用されている BDI、HAM-D、CGI を施行する。
   - (b) 家族には FMSS を施行する。
   - (c) 面接の日時・場所は対象者の意向に沿って決定する。
   - (d) インタビューの内容は録音する（事前に説明し同意を得ることが前提）
   - (e) 1 回のインタビューはおよそ 60 分から 90 分間を要する
   - (f) FMSS と FAS は同時に実施する。
2. 図 1（B）
   - (a) FMSS の面接内容は、テープ起こしを行い、資格を有する者が EE の判定を行う。
3. 図 1（C）
   - (a) EE の判定を元に、高 EE 群と低 EE 群に分け、それぞれの群で、無作為に心理教育

実施群と対照群に分ける。

(b)　心理教育群には、心理教育を実施する。

4.　図 1（D）

(a)　追跡調査を行い、9 ヶ月目に CFI 施行する。

(b)　BDI、HAM-D、CGI は 3 ヶ月毎に実施し、再発などの確認を行う。

5.　図 1（E）

(A)と同じ評価を行う。

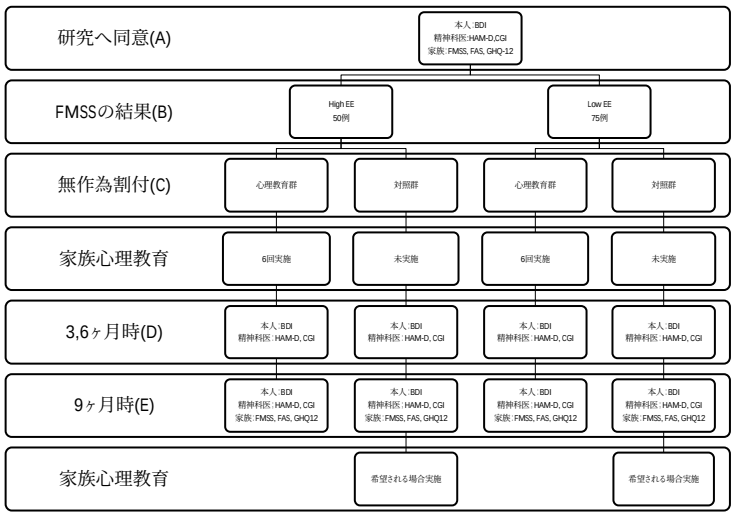


図 1

6.　心理教育の方法（1 回約 1 時間 30 分、計 6 回の予定）知識教育と対処技能の教育を行う。

知識教育のテーマは以下の通りである。

(1)　原因について

(2)　症状について

(3)　治療について

(4)　病気の経過、予後について

(5)　復職などの社会復帰について

(6)　総括・まとめ

4. 研究成果

研究の開始にあたり、心理教育に用いる視覚教材の作成に着手した。世の中には、うつ病に関するいろいろな情報が氾濫しているが、患者、家族にとって本当に必要な情報、正確な情報を取捨選択することはとても困難である。中には、薬の副作用ばかり強調されていたり、薬物療法を最初から否定するような内容もあり、バランスに欠いている。そのため、わかりやすい情報を整理して伝える方法として、視覚教材（本と動画）を利用することが、心理教育を進めるうえでとても有用である。（図 2　表紙と目次、第 1 章の部分を例示）

(図 2　表紙と目次)

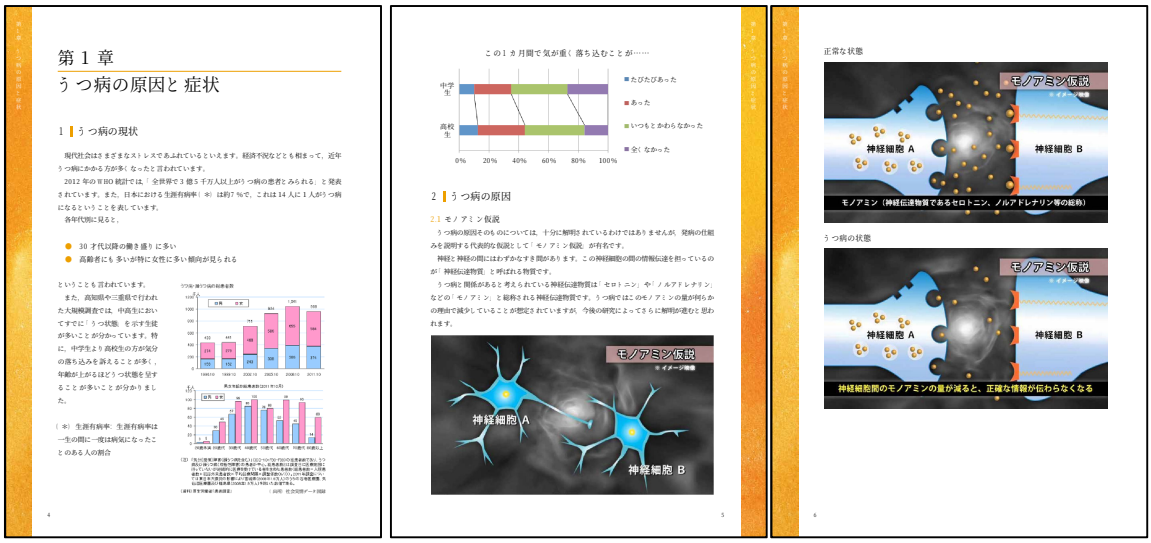


図２ 第１章の一部

作成に当たって、注意したのは、わかりやすくするために、図版を多く利用し、うつ病の思考抑制があっても理解が追いついていけるよう意識した。また、情報は極力必要最小限にとどめ、心理教育の場面で、スタッフが不足している情報などを、当事者の背景を意識して補足しやすくなるように配慮した。

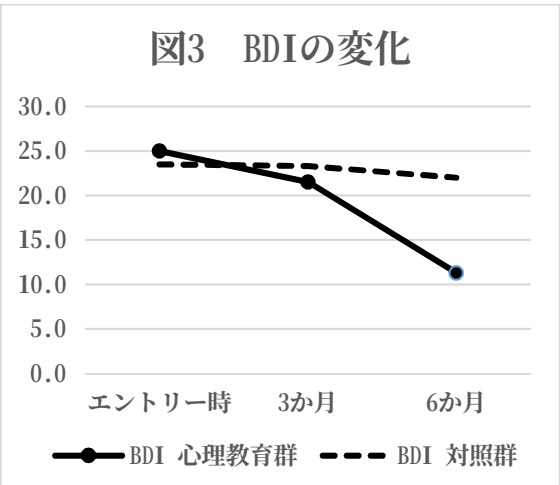
また、動画教材もテキストに合わせて作成をした。とくに、うつ病を経験した方に、体験談を語っていただいた。当事者の声は、医療者の言葉よりも重く、心理教育を受ける当事者の方達にエンパワメントを伝える力が大きい。

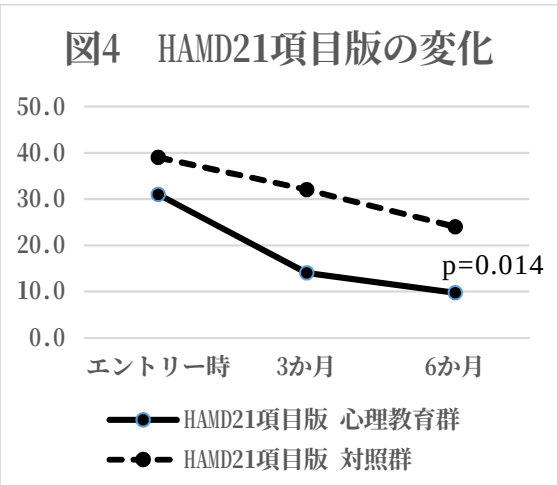
こうして完成した教材は、日本精神神経学会、日本心理教育・家族教室ネットワーク、うつ病学会などのシンポジウムで紹介し、必要な施設に無料で配布し、本研究から得た成果を還元することができた。

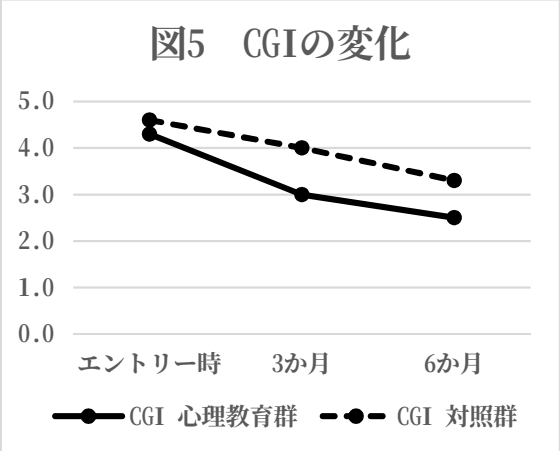
本研究に参加していただいたのは、12 組の当事者と家族であった。当事者は、ICD-10 および DSM-IV-TR にて全員うつ病と診断されている。患者平均年齢 69.5 歳、家族平均年齢 62.8 歳であった。家族の属性は、子 4 名、親 1 名、配偶者 7 名となった。エントリー時の患者の BDI（平均）は 25.3 点、HAMD（21 項目版）35.0 点であった。

無作為に心理教育群（6 組）と対照群（6 組）に分けた。途中、3 組が 6 か月以降の研究参加への中止の申し出があったため、以降の結果は、6 か月までの結果を示す。

表1	BDI		HAMD21項目版		CGI	
	心理教育群	対照群	心理教育群	対照群	心理教育群	対照群
エントリー時	25.0	23.5	31.0	39.0	4.3	4.6
3か月	21.5	23.3	14.0	32.0	3.0	4.0
6か月	11.3	22.0	9.7	24.0	2.5	3.3







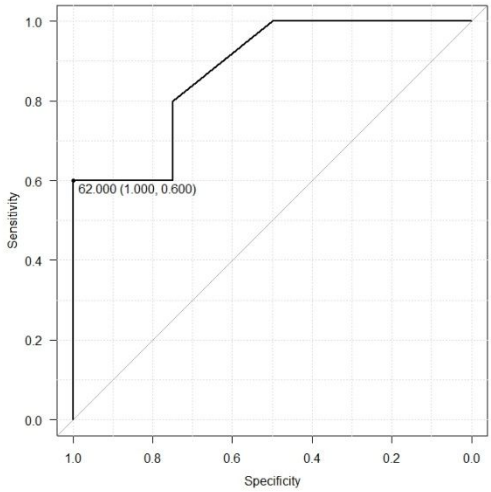


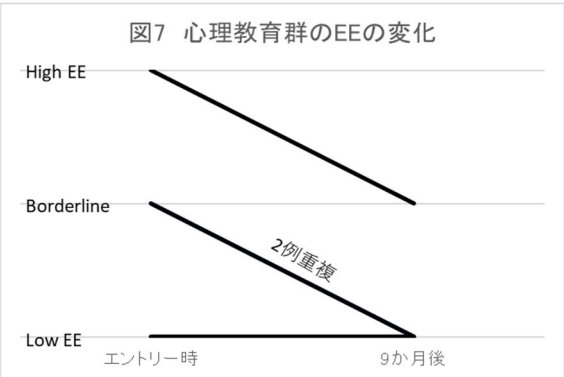
図 6　FAS のカットオフ値の検討（ROC 曲線）

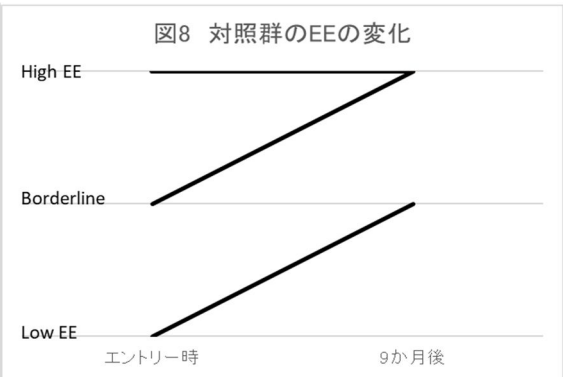
表 1 に、エントリー時、3 か月後、6 か月後の精神症状の評価をまとめた。またわかりやすく図 3～図 5 にグラフで表した。これによると、家族への心理教育を行うことによって、患者本人の精神症状は改善する傾向を認めることができた。特に、HAMD21 項目における 6 か月後のスコアでは、心理教育を行った群と行わなかった対照群において、多元配置分散分析において有意差を認めた（図 4）。

さらに、FAS による EE 判定のためのカットオフ値の探索を検討した。FAS の得点による EE の判定の妥当性を検討するために、FMSS による EE の判定をもとに ROC 曲線を用いて検討を行った。図 6 に示すとおり、62 点をカットオフ値とすると、感度 60%、特異度 100%であることが分かった。統合失調症におけるカットオフ値は 60 点であったことから、大きな差異は認めなかった。このことから、EE の判定を行うために、CFI や FMSS を行うことは理想ではあるが、現実的な実行性の点において困難である事から、こうした質問紙法によって EE の判定が簡便に行うことが可能になると、臨床現場で行っている心理･社会的治療の促進や効果の判断に大きな貢献ができると考えられる。

また、EE の変化について、9 か月終了時まで調査が継続できたそれぞれ 4 ケースずつについてまとめると、以下のような事が分かった。それぞれの群 4 例ずつのため、有意な差までは判断できないが、心理教育を行うことによって、EE は全てのケースにおいて、エントリー時に High EE または、Borderline EE と判断された家族は、それぞれ 9 か月後には EE が下がっている。またもともと Low EE と判断された家族はそのままであった。しかし、心理教育を行わなかった対照群では、エントリー時に Low または Borderline EE と判断された家族は 9 か月後にはそれぞれ EE が上がっており、またエントリー時に High EE と判断された家族は、9 か月後も改善することなく High EE のままであった事がわかった。これによって、家族心理教育によって、家族の EE が下がり、少なくとも 9 か月間はその効果をみとめ、さらには、本人の精神症状の改善にも貢献していると言えるだろう。一方、心理教育を行わなかった場合は、EE が悪化する事が多く、その分、精神症状の改善にも影響を及ぼしていることが言える。

以上を総合すると、うつ病の家族心理教育は、家族の感情表出の改善に寄与し、本人の精神症状の改善にも寄与する、有効な心理･社会的治療の 1 つと言えるだろう。





５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　18件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 藤田博一	４．巻 62
２．論文標題 特集SUND臨床試験のインパクト－日本初の医師主導型抗うつ薬大規模臨床試験から学ぶ　SUND臨床試験に参加して行った工夫　高知大学医学部附属病院から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 精神医学	６．最初と最後の頁 52-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤田博一	４．巻 61
２．論文標題 特集精神疾患における病識・疾病認識－治療における意義　病識・疾病認識を深める心理教育	５．発行年 2019年
３．雑誌名 精神医学	６．最初と最後の頁 1413-1420
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤田博一	４．巻 48
２．論文標題 特集精神科臨床における家族への支援と働きかけ－家族心理教育－うつ病家族への支援・心理教育	５．発行年 2019年
３．雑誌名 臨床精神医学	６．最初と最後の頁 707-714
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤田博一	４．巻 121
２．論文標題 特集　今必要な精神医療における家族支援－家族への心理教育を軸として－うつ病の家族心理教育	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本精神神経学雑誌	６．最初と最後の頁 124-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Furukawa Toshi A、Horikoshi Masaru、Fujita Hirokazu、Tsujino Naohisa、Jinnin Ran、Kako Yuki、Ogawa Sei、Sato Hirotoshi、Kitagawa Nobuki、Shinagawa Yoshihiro、Ikeda Yoshio、Imai Hissei、Tajika Aran、Ogawa Yusuke、Akechi Tatsuo、Yamada Mitsuhiko、Shimodera Shinji、Watanabe Norio、Inagaki Masatoshi、Hasegawa Akio	4．巻 5
2．論文標題 Cognitive and Behavioral Skills Exercises Completed by Patients with Major Depression During Smartphone Cognitive Behavioral Therapy: Secondary Analysis of a Randomized Controlled Trial	5．発行年 2018年
3．雑誌名 JMIR Mental Health	6．最初と最後の頁 e4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2196/mental.9092	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ando Shuntaro、Koike Shinsuke、Shimodera Shinji、Fujito Ryosuke、Sawada Ken、Terao Takeshi、Furukawa Toshi A.、Sasaki Tsukasa、Inoue Shimpei、Asukai Nozomu、Okazaki Yuji、Nishida Atsushi	4．巻 78
2．論文標題 Lithium Levels in Tap Water and the Mental Health Problems of Adolescents: An Individual -Level Cross- Sectional Survey	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Journal of Clinical Psychiatry	6．最初と最後の頁 e252～e256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4088/JCP.15m10220	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Iga J, Watanabe SY, Numata S, Umehara H, Nishi A, Kinoshita M, Inoshita M, Shimodera S, Fujita H, Ohmori T	4．巻 31
2．論文標題 Association study of polymorphism in the serotonin transporter gene promoter, methylation profiles, and expression in patients with major depressive disorder.	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Hum Psychopharmacol	6．最初と最後の頁 193-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/hup.2527	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 M Ikeda, A Takahashi, Y Kamatani, et al.	4．巻 23
2．論文標題 A genome-wide association study identifies two novel susceptibility loci and trans population polygenicity associated with bipolar disorder	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Molecular Psychiatry advance online publication	6．最初と最後の頁 639-647
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/mp.2016.259	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Watanabe SY, Iga J, Ishii K, Numata S, Shimodera S, Fujita H, Ohmori T.	4．巻 66-67
2．論文標題 Biological tests for major depressive disorder that involve leukocyte gene expression assays.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 J Psychiatr Res	6．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jpsychires.2015.03.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Frank F, Wilk J, Kriston L, Meister R, Shimodera S, Hesse K, Bitzer EM, Berger M, Holzel LP.	4．巻 259
2．論文標題 Effectiveness of a brief psychoeducational group intervention for relatives on the course of disease in patients after inpatient depression treatment compared with treatment as usual--study protocol of a multisite randomised controlled trial.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 BMC Psychiatry	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12888-015-0633-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Fujito R, Kamimura N, Ikeda M, Koyama A, Shimodera S, Morinobu S, Inoue S.	4．巻 16
2．論文標題 Comparing the driving behaviours of individuals with frontotemporal lobar degeneration and those with Alzheimer's disease.	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Psychogeriatrics	6．最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Numata S, Ishii K, Tajima A, Iga J, Kinoshita M, Watanabe S, Umehara H, Fuchikami M, Okada S, Boku S, Hishimoto A, Shimodera S, Imoto I, Morinobu S, Ohmori T.	4．巻 10
2．論文標題 Blood diagnostic biomarkers for major depressive disorder using multiplex DNA methylation profiles: discovery and validation.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Epigenetics	6．最初と最後の頁 135-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15592294.2014.1003743.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Numata S, Ishii K, Tajima A, Iga J, Kinoshita M, Watanabe S, Umehara H, Fuchikami M, Okada S, Boku S, Hishimoto A, Shimodera S, Imoto I, Morinobu S, Ohmori T.	4．巻 10
2．論文標題 Blood diagnostic biomarkers for major depressive disorder using multiplex DNA methylation profiles: discovery and validation.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Epigenetics	6．最初と最後の頁 135-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15592294.2014.1003743	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nishida A, Shimodera S, Sasaki T, Richards M, Hatch SL, Yamasaki S, Usami S, Ando S, Asukai N, Okazaki Y.	4．巻 159
2．論文標題 Risk for suicidal problems in poor-help-seeking adolescents with psychotic-like experiences: findings from a cross-sectional survey of 16,131 adolescents.	5．発行年 2014年
3．雑誌名 Schizophr Res	6．最初と最後の頁 257-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.schres.2014.09.030	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shiraishi N, Nishida A, Shimodera S, Sasaki T, Oshima N, Watanabe N, Akechi T, Furukawa TA, Okazaki Y.	4．巻 9
2．論文標題 Relationship between violent behavior and repeated weight-loss dieting among female adolescents in Japan.	5．発行年 2014年
3．雑誌名 PLoS One	6．最初と最後の頁 e107744
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0107744	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Watanabe N, Furukawa TA, Shimodera S, Katsuki F, Fujita H, Sasaki M, Sado M, Perlis ML.	4．巻 69
2．論文標題 Cost-effectiveness of cognitive behavioral therapy for insomnia comorbid with depression: Analysis of a randomized controlled trial.	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Psychiatry Clin Neurosci	6．最初と最後の頁 335-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/pcn.12237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kitagawa Y, Shimodera S, Togo F, Okazaki Y, Nishida A, Sasaki T.	4．巻 9
2．論文標題 Suicidal feelings interferes with help-seeking in bullied adolescents.	5．発行年 2014年
3．雑誌名 PLoS One	6．最初と最後の頁 e106031
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0106031	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kinoshita M, Numata S, Tajima A, Ohi K, Hashimoto R, Shimodera S, Imoto I, Takeda M, Ohmori T.	4．巻 4
2．論文標題 Aberrant DNA methylation of blood in schizophrenia by adjusting for estimated cellular proportions.	5．発行年 2014年
3．雑誌名 Neuromolecular Med	6．最初と最後の頁 697-703
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12017-014-8319-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shimodera S, Watanabe N, Furukawa TA, Katsuki F, Fujita H, Sasaki M, Perlis ML.	4．巻 10
2．論文標題 Change in quality of life after brief behavioral therapy for insomnia in concurrent depression: analysis of the effects of a randomized controlled trial.	5．発行年 2014年
3．雑誌名 J Clin Sleep Med	6．最初と最後の頁 433-439
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5664/jcsm.3624	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 古川壽亮，下寺信次，明智龍男，山田光彦，藤田博一他	4．巻 56
2．論文標題 SUN(^_^)D－大うつ病に対する新規抗うつ剤の最適使用戦略を確立するための大規模無作為割り付け比較試験	5．発行年 2014年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 477-489
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 秋山剛，五十嵐良雄，藤田博一，渡邊未来，下寺信次	４．巻 24
２．論文標題 うつ病を中心とした気分障害の就労支援	５．発行年 2015年
３．雑誌名 日本社会精神医学会雑誌	６．最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上村直人,藤戸良子,大石りさ,諸隈陽子	４．巻 19
２．論文標題 認知症と運転	５．発行年 2014年
３．雑誌名 高知県医師会医学雑誌	６．最初と最後の頁 72-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上村直人,明神恵美,大石りさ,諸隈陽子,福島章恵,井上新平	４．巻 125
２．論文標題 若年期アルツハイマー病の在宅ケア破綻予防と家族史的アプローチの試み～ケアマネのエンパワーメント向上を目的とした生活臨床的試み	５．発行年 2014年
３．雑誌名 日本老年精神医学雑誌	６．最初と最後の頁 691-696
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井上新平,上村直人	４．巻 45
２．論文標題 高齢者のメンタルヘルス総論	５．発行年 2014年
３．雑誌名 心と社会	６．最初と最後の頁 94-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 藤田博一
2．発表標題 シンポジウム72「今必要な精神科臨床における心理教育」，うつ病の心理教育
3．学会等名 第115回日本精神神経学会総会
4．発表年 2019年

1．発表者名 藤田博一
2．発表標題 シンポジウム2「気分障害の心理教育の実際と展開」，うつ病の心理教育のエビデンスと実践
3．学会等名 第15回日本うつ病学会総会
4．発表年 2018年

1．発表者名 藤田博一
2．発表標題 シンポジウム15「今必要な精神医療における家族支援-家族への心理教育を軸として」，うつ病の心理教育
3．学会等名 第114回日本精神神経学会総会
4．発表年 2018年

1．発表者名 藤田博一，関安孝，野田智洋，山下竜右，北村聡子，高田淳，瀬尾宏美
2．発表標題 チーム基盤型学習における学習者の評価と学習促進
3．学会等名 第48回日本医学教育学会大会
4．発表年 2016年

１．発表者名 関安孝，藤田博一，山下竜右，北川周子，三木洋一郎，瀬尾宏美
２．発表標題 医学生のための物理学でのTBLの実践
３．学会等名 第48回日本医学教育学会大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 田尻巧，鈴木匠，井上知紀，立道理乃，瀬尾宏美，藤田博一，高田淳
２．発表標題 医学教育に対する医学生の満足度は学習意欲と関連があるか
３．学会等名 第48回日本医学教育学会大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 黒江崇史，上村夏実，藤本裕貴，瀬尾宏美，藤田博一，高田淳
２．発表標題 医学教育への参画に向け-学生団体「BRIDGE」の設立-
３．学会等名 第47回日本医学教育学会大会
４．発表年 2015年

１．発表者名 藤田博一
２．発表標題 シンポジウム「メンタルヘルスリテラシー研究-現状を知り今後の活動へ生かす-」，高校生のメンタルヘルスリテラシー調査から最近のアンティスティグマ研究も含めて
３．学会等名 第2回公益財団法人こころのバリアフリー研究会総会
４．発表年 2015年

１．発表者名 藤田博一
２．発表標題 シンポジウム2：うつ病の心理教育と家族支援ー病院での心理教育から地域・企業での支援までーうつ病の心理･社会的治療のエビデンス
３．学会等名 心理教育・家族教室ネットワーク第18回研究集会名古屋大会
４．発表年 2015年

１．発表者名 渡部真也，伊賀淳一，沼田周助，下寺信次，藤田博一,石井一夫,大森哲郎
２．発表標題 末梢白血球の遺伝子発現パターンを利用した大うつ病の診断バイオマーカーに関する検討
３．学会等名 第36回生物学的精神医学会
４．発表年 2014年

１．発表者名 奥谷文乃，藤田博一，伊藤広明，横畠悦子，小林泰輔，兵頭政光
２．発表標題 パニック障害患者における嗅覚機能の特性
３．学会等名 第53回日本鼻科学会総会
４．発表年 2014年

１．発表者名 渡辺範雄，古川壽亮，下寺信次，香月富士日，藤田博一，佐々木恵，佐渡充洋，Michael Perlis
２．発表標題 うつ病併存不眠に対する短期睡眠行動療法の費用対効果分析;RCTの結果から
３．学会等名 第110回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2014年

１．発表者名 上村直人,永野志歩,福島章恵,今城由里子,泉本雄司,森信繁
２．発表標題 物忘れ外来を受診した発達障害の男性例
３．学会等名 第29回日本老年精神医学会
４．発表年 2014年

１．発表者名 上村直人,須賀楓介,土居江里奈,下寺信次,森信繁,井上新平
２．発表標題 高齢者のメンタルヘルスにおける家族史的アプローチの有用性-森田療法と家族史的生活臨床の統合の試み-
３．学会等名 第110回日本精神神経学会
４．発表年 2014年

１．発表者名 上村直人,須賀楓介,土居江里奈,赤松正規,下寺信次,森信繁
２．発表標題 物忘れ外来におけるうつ状態の鑑別の重要性について -認知症以外の物忘れを主訴とするうつ状態の鑑別を要した2事例からの考察-
３．学会等名 第11回日本うつ病学会
４．発表年 2014年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	上村　直人 (Kamimura Naoto) (10315004)	高知大学・臨床医学部門・講師 (16401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	下寺　信次 (Shimodera Shinji) (20315005)	京都大学・医学研究科・客員研究員 (14301)	
研究分担者	須賀　楓介 (Suga Yosuke) (20527593)	高知大学・医学部・特任助教 (16401)	
研究分担者	宜保　直行 (Gibo Naoyuki) (40720610)	高知大学・臨床医学部門・助教 (16401)	削除：2015年4月10日